

氏名(国籍)	ほん 洪	みん 珉	びよ 杓	(韓 国)
学位の種類	博 士 (言語学)			
学位記番号	博 甲 第 1,301 号			
学位授与年月日	平 成 6 年 7 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当			
審査研究科	文芸・言語研究科			
学位論文題目	日本語音声の丁寧さの社会言語学的研究			
主 査	筑波大学教授	Ph. D.	草 薙	裕
副 査	筑波大学教授		高 田	誠
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	湯 澤	質 幸
副 査	筑波大学助教授		荻 野	綱 男
副 査	筑波大学助教授		城 生	伯太郎

論 文 の 要 旨

本論文は、実験音声学の見地とともに、社会言語学的見地によるさまざまな調査を行い、多角的なデータを収集した上で、それらに基づいて日本語の音声がどのように丁寧さを表現しているかを総合的に明らかにしようとしたものである。従来ほとんど研究されていない音声による丁寧さに着目し、多数の日本人ならびに韓国人を対象として、音声による丁寧さに関する意識調査を行い、丁寧さを音声で表そうという意識があることを明らかにした上で、音声データによる聴取実験を多くの被験者に行い、音声の丁寧さがあることを証明している。さらに、丁寧と判断された音声データを音響音声学的に分析して丁寧と受け取られる音声の特徴を究明している。

本論文の構成は次の通りである。

- 第1章 日本語の敬語の働きと欧米の丁寧さの原理の働き
- 第2章 日本語における丁寧表現の分類と本研究の捉え方
- 第3章 プロソディーと音声の丁寧さ
- 第4章 丁寧表現に関する意識調査:日韓比較研究
- 第5章 文レベルにおける音声の丁寧さ
- 第6章 談話レベルにおける音声の丁寧さ
- 第7章 本研究のまとめ及び今後の課題

第1章では、欧米の丁寧さの原理と日本語における敬語使用の意識について主要ないくつかの文献を挙げ、両者の共通点と相違点を見いだしつつ、丁寧表現の普遍性について検討している。

第2章では、日本語の丁寧表現に関して主な先行研究の枠組を検討した上で、本論文で提案する丁寧さの枠組みについて述べる。丁寧表現は、「形式の丁寧さ」「音声の丁寧さ」「行動の丁寧さ」の三つの丁寧さが総合的に機能してできあがるものにとらえている。言語表現は、言語形式そのものと、それを音声化した音声表現とから成り立ち、音声表現は母音・子音などの語音の特徴のほかにイントネーションやポーズなどの韻律的特徴をもつ。また、言語形式ではないものであるが、パラ言語と呼ばれる発話の速度や高さなどの特徴がある。これらのうち、韻律的特徴とパラ言語が音声の丁寧さを担う中心的なものである。

第3章では、韻律的特徴とパラ言語を「プロソディー」として捉えた上で、それを構成する要素ひとつひとつについてその定義や機能を述べる。韻律的特徴としては、アクセント、イントネーション、プロミネンス、リズム、ポーズを取り上げ、パラ言語としては、声の高さ、音の長さ、音の強さを取り上げる。

第4章では、日本人と韓国人それぞれの大学生と社会人を対象にして行った丁寧表現に関する意識調査の結果について述べる。両国とも敬語使用が丁寧さの判断基準として重視されるが、顔の表情や声の調子も丁寧さを表すと意識されている。さらに、外国人に対しては、敬語使用がうまくできないことを考慮して、丁寧さの判断基準として非言語的な側面がより重視されることがわかった。また、遅い音声、低い音声などが丁寧だと意識されていることもわかった。目上の人・見知らぬ人・親しい友人に対する発話を比べると、発話のしかたを変えていると意識する人が多く、敬語の使い分けとともに、音声の使い分けをいう現象があることが確認された。

第5章では、丁寧な発話と丁寧でない発話がどのように聞き取られているかを調べる実験の結果について述べている。まず、「ここから銀座までどのくらいかかるんでしょうか」と「もしもし、田中さんのお宅ですか」の二つの文を取り上げ、俳優と一般人の12人の人に丁寧な音声と丁寧でない音声で発音させ、それを編集して、一般人202人に聞かせてどれくらい丁寧聞こえるかを調査した。この結果、丁寧な気持ちで発話した音声はすべて丁寧と聞き取られ、丁寧でない気持ちで発話した音声はすべて丁寧でないと聞き取られることが確認された。次に、それぞれの音声をパソコンに入力して音響分析を行い、それぞれの音声がどのような韻律的特徴を有しているかを調べた。その結果、丁寧な音声というのは、発話の持続時間が短く、中でもポーズ部分が長くなった音声であることがわかった。基本周波数を測定した結果では、個人差があるが、平均的には丁寧にいうときは高くなる傾向が認められた。また、文末イントネーションも丁寧さの判断にかかわっていることも示された。

第6章は、談話の中での音声の丁寧さについて調査したものである。大学生8人に4組のペアを作らせ、丁寧な場面と丁寧でない場面で一連の会話をさせる。その会話の中から、あらかじめ予定していた文を抜き出して、聴取用のテープを作成した。それらの文は、感謝の表現「どうもありがとうございました」、挨拶の表現「こんにちは」、問いかけの表現の「あの、ちょっとおうかがいしたいんですが」、応答の表現「はい、なんですか」、謝罪の表現「もうしわけありません」、あいづちの表現「あ、そうですか」の6種類である。それを314人の大学生に聞かせ、丁寧度を判断させた。この調査でも、丁寧な場面で発話された音声は丁寧聞こえ、丁寧でない場面で発話された音声は丁寧で

なく聞こえることが確認された。また、丁寧度の高い音声では、男性よりも、女性の音声のほうがより丁寧に聞こえるということがわかった。聴取実験に用いた音声の音響分析を行った結果、丁寧度の高い音声は、基本周波数が高く、発話時間が長かった。特に、丁寧度の高い音声は発話の前半よりも後半のほうがさらにピッチが高くなる傾向があることがわかった。

第7章は、以上の各章のまとめであり、丁寧表現は普遍的に存在するものであることを述べ、丁寧さの定義や丁寧表現の捉え方を示し、本研究の位置付けを明示した。日本語教育への応用や今後の課題にも言及している。

審 査 の 要 旨

日本語における「丁寧さ」の表現の研究は、いわゆる尊敬語、謙譲語、丁寧語などに代表される敬語の研究として数多く行われてきた。日本語の敬語の研究は、どのような形式が待遇表現としてどのような意味を持つかという、いわば敬語の構造の研究という伝統的なものが、従来いわれてきたような敬語表現が、本当にそのように用いられているかという実態調査をふまえた社会言語学的な研究が主流である。それに対して、本研究は「丁寧表現における話し手は聞き手に対する丁寧さの程度に応じて音声を使い分ける」という仮説から出発して、それを数多くの人に対する意識調査で確かめた上、聴取実験でそれを証明したことは大きく評価できる。

敬語の先行研究の中には待遇表現とプロソディーの関連に言及したものがなくはないが、それらは、単に音色、速さの調節などが関わっているという指摘にすぎず、本研究が、大規模な聴取実験を行って、「丁寧さ」とプロソディーの関わりを明らかにしたのみならず、その実験によって丁寧だとされた表現をさらに音響音声学的に分析し、どのようなプロソディーの要素が実際に表現が丁寧だと受け取られることと関わっているかを究明したことは学界に対する大きな貢献であるといえる。

また、「丁寧さ」とプロソディーとの関わりは日本語のみに留まらず、韓国語にもあることを韓国人に対する意識調査で明らかにし、さらに意識としては日本人と韓国人の間ではプロソディーの要素が微妙に異なるという結果を得ている。微妙に異なるなら、日本語の表現がそのプロソディーによって、発話者である日本人の意図が日本語学習者である韓国人の聞き手に誤解を与えないかという疑問が出てくるのが当然であり、韓国人を被験者とした聴取実験をしていれば、さらに日本語教育への貢献も大きかったと惜まれる。さらに、聴取実験及びその音響音声学的分析で「丁寧さ」がプロソディーのどういう要素と関わっているかを明らかにしているが、それがなぜであるかの究明までには至っていないのは残念であり、これは今後是非取り組んでもらいたい。

このような弱点にもかかわらず、本論文は博士論文として十分独創性があり、学界への貢献がおおいにあると認められる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。